

大川 清 編

『栃木県
宇都宮市 水道山瓦屋』

『下野古代文字瓦譜』

北村 文治

『水道山瓦屋』は、宇都宮市北方、宇都宮丘陵西側の通称「水道山」南麓の小谷に構築された古代瓦窯群についての、編者大川清氏による多年の発掘調査研究の成果をまとめた国士館大学文学部考古学研究室の報告書である。本書は、このような報告書にふさわしく、すでに報告済みの第一次調査（昭和三十七年）・第二次調査（昭和五十二年）の報告書を若干の補訂を加えたのみで再録、最終調査である第三次調査（昭和五十五年、国士館大学考古学研究室の実習を兼ねる）の報告とあわせて一書にまとめたものであるが、編者は大著『下野古代窯業遺跡』（昭和五十年）にも示されているように夙に窯業生産の実態を当該社会の人的組織的需給関係において追求することを目標とされており、本書もまた、そうした観点からの水道山瓦屋の史的意義の「総括」ということができよう。

発掘調査はこの小谷の西側、つまり南斜面はもちろん、東側の斜面にもトンチを設定、必要な範囲はほぼ全域に及んでいるが、窯跡は第一次で1号・2号窯、第二次でつくりかけの窯跡、第三次では第一次に隣接して2号窯跡を検出、けっきょく操業のあった窯跡は三基のみであるが、そのほか三基の窯のステ場も確認、また周辺部の瓦の散布も調査されている。報告は発掘時の諸条件はもとより、遺構遺物の状況についても簡潔かつ入念に記述されており、年次を異にする発掘調査の経緯がよくわかるのも読者にはありがたい。

しかし本報告の特徴は、なんと言っても出土瓦の綿密な調査研究であろう。

編者は第一次から第三次まで、屋瓦の出土状況を男瓦・女瓦・鎧瓦・宇瓦・堤瓦・面戸瓦・文字瓦等について克明に報告し、さらに進んで造瓦法の説明にまで及んでいる。これは編者の独壇場ともいうべきものであろう。すなわち編者は、すでに第一次の調査で水道山瓦屋生産の宇瓦と下野薬師寺出土宇瓦とが同範である点に着目し、その文様の同類である上神主庵寺出土宇瓦と、さらに上神主と同範であると思われる結城庵寺跡出土宇瓦とを比較考察する。これによると、三者は一見同時同範と考えるがそうではなく、下野薬師寺瓦を原型とし、「ふみかえし」といった技工で第2次範をつくって生産したのが上神主宇瓦であり、また、下野薬師寺瓦にある「範割れ」痕は上神主宇瓦にもあるが、それのない結城庵寺宇瓦は下野薬師寺瓦の破損部分の修正か、破損のないものの「ふみかえし」技工かの、いずれかの第2次造範による造瓦と考えられるとし、高井悌三郎氏著『常陸台渡庵寺跡・下総結城八幡瓦窯跡』の見解を一部訂正して、△第一範▽水道山瓦屋↓下野薬師寺、△第二範A▽水道山瓦屋↓下野薬師寺・上神主庵寺、△第二範B▽八幡瓦窯↓下野結城庵寺という奈良時代における造瓦順序を想定している。次いで編者は、このような造瓦順序の想定に立つて、第3次調査で判明した鎧瓦と宇瓦の組合せと第3次までの人名瓦・郡名瓦の出土地点との考察によって、1・2号窯で下野薬師寺の屋瓦を焼成し、3号窯で下野国分寺創建初期と上神主庵寺・多功遺跡の屋瓦を焼成したこと、また文字瓦のうち郡名は国分寺用、人名は上神主多功用であることが明らかになったとする。郡名瓦中、「塩」は塩谷郡、「内」は河内郡、「那」は那須郡であるから、これらが国分寺用であることは歴史的にまことに興味深い。

最後に編者は「まとめ」として、まず水道山出土軒先瓦の編年(Ⅰ期Ⅱ期Ⅲ期)を出土遺跡との関連で整理し、そのうえで下野薬師寺の金堂・講堂の屋瓦製作時期を問題提起し、正倉院文書天平五年の右京計帳に見える下野国薬師寺造司

工従六位上於伊美吉子首、同文書天平十年の駿河国正税帳に見える下野国造薬師寺司宗藏等を薬師寺造管第Ⅱ期の金堂・講堂にかかわりをもった人達とし、その考えを基礎に続日本紀大宝三年三月の「賜從四位下下野朝臣古麻呂功田二十町」という記事を下野薬師寺創建の功によるものであるとされる。ここには編者の想像力の豊かさを見ることができよう。ただ、功田は直前の二月の記事にもあるように朝廷でいかなる功績かを審議してきめる特別の恩典であるから、この三月の記事に功績の記載がないのは直前の律令撰定の功をうけ、藤原不比等に次ぐ地位からしても新たに別格に功田二十町(合計三十町)を賜わったものとするのが一般の解釈であることを付記しておきたい。編者はしかし次に、八世紀の下野の造寺瓦の最初の本格的な生産が水道山であったとの観点から、薬師寺第Ⅱ期に活躍した人物として河内郡司に注目し、その同族である都賀郡司を促がして郡内に乙女不動原瓦屋(昭和五十三年国指定)をつくらせ国分二寺の造瓦生産をすすめ、さらに河内都賀郡司主導のもとに、安蘇郡司とも計って三龜山北西麓に町谷瓦屋を新設して国内全郡の瓦生産を負担できるようにし、国府諸堂宇の建設のためにはまた別に水道山に近い戸祭丘陵の根瓦瓦屋をも構築してあたったという、下野国一帯の瓦屋の盛衰発展の図式を考察し、そしてそのような発展に寄与したものとして下毛野朝臣古麻呂を中心とする在朝・在郷の下毛野一族のたくましい政治的愛郷的活躍を想定している。

恐らく編者は、長い間下野の古代窯業史の研究に従事し、地理的に国内の最好地と思える平野の中心部にはほ東西にならぶ薬師寺・国分寺・国分尼寺・国府の壮大な規模をその研究体験から考察しようとするとき、文献史料にはない造瓦組織の問題を除いて史的実態の究明はありえないと考えておられるであろう。そのことは今後ともに正しいと思う。そして水道山瓦屋の研究も、そうした視点で進めたことによって史的意義を総括しえたと考えられる。その意味で本書は、多少難解ではあるが、たんに一瓦窯址の発掘調査報告ではなく、まさ

に造瓦生産より見た下野古代史と称すべきものであらう。

(B4判、本文四〇頁、図版八四頁、付編「推定水道山瓦屋銘記人名瓦(原寸)」、昭和五七年三月二〇日、国士館大学文学部考古学研究室発行)

『下野古代文字瓦譜』は、右の『水道山瓦屋』所収の「推定水道山瓦屋銘記人名瓦」に、県内出土の郡名瓦、型押等を合せて一書としたものであり、図版1~65は人名瓦、図版66~96が郡名瓦、図版99~121が文字瓦・不明文字瓦・寺院名文字瓦等、図版122~125は型押各種である。編集は大川清・田熊信之両氏による。

本書は、古代寺院の文字瓦の研究に長年従事してこられた編者が、日本窯業史研究所報告第十四冊として公刊された下野古代文字瓦の拓影集である。図版番号にそって出土遺跡名を列挙すると、上神主庵寺跡・多功遺跡・茂原南原遺跡・水道山瓦屋・根瓦瓦屋・国府城・薬師寺跡・東山窯跡・国分僧寺跡・那須官衛跡・国分尼寺跡・豊岡遺跡・豊岡遺跡周辺遺跡・町谷瓦屋・大芝原瓦窯跡・鶴舞瓦屋・三垂周辺・八幡窯跡・犬伏周辺・大慈寺庵寺跡・北山窯跡・免鳥遺跡等となる。数の上ではやはり、上神主・水道山・国分僧尼寺のものが多い。人名は某部十名の形式が圧倒的に多く、編者が意図する造瓦集団を考える場合のナマの資料である。郡名では、都賀郡・寒川郡・安蘇郡・足利郡・那須郡・梁田郡・河内郡・塩屋郡・芳賀郡を意味する一~二字のヘラ書、文字瓦には「寺」「郡」「大」「文」「生」「上瓦」「上」「下」「王」「本」「二」「三」「五」などのヘラ書がある。寺院名には「国分寺」が多い。いずれにしても貴重な資料集であり、編者の労を多としたい。

(B4判、二五二頁全図版、昭和五七年四月、日本窯業史研究所発行)

(国士館大学文学部教授)